

第14回記念祭 新聞局展示会

第 14 回
記 念 祭
特 別 号

重点は評論に

洛星新聞編集局 |

I 学校新聞を考える

唯漠然とした意識の下に、惻性的に学校新聞を発行しても余り意味があるとは思われない。そこで洛星新聞局では第四回記念祭の展示会に当って、学校新聞というものをもう一度考えてみることにした。猶、これは洛星新聞局の考えてある。

これら三つの考えを根底にして学校新聞は発行されるべきなのである。又学校新聞はこのような目的で発行されるという事はこれらのの事を成し遂げるか又は成す為の手助けとならなくては、ここに存在価値が現われないのである。生徒に校内の諸々の事を報道し、又

1 新聞作製に当って
の目的。

学校の新聞が創られる時には常にある種の目的を自覚して作られる。その目的はその時の趣意に従っていろいろと異なるが、本質的な目的をどこでもう一度考え直してみよう。

校との親密を図り、学校の発展の糧に依する事が学校の新聞に科せられた使命である。この使命を果そうと心掛けずに発行される新聞等は何に目的がないのか分らない中途半端な新聞といわれはならない。

2 学校新聞のもつ多
面性。

以上の学校新聞の目的について考へて来たが次に学校新聞の實際にもつ多くの要素と働き、いい換えれば学校新聞の多面性について考へてみよう。学校新聞は大体五つの要素、五つの働きを持っている。それらは、記録性、報道性、評論性、娯楽性その他の五つである。

イ、記録性、学校新聞においてこの記録性のもつ重大性は一般新聞には比べられないものがある。それは一般社会においては国会議事録を筆頭に多くの永続的記録出版物があるけれど、学校という中において存在する多くの記録書類

の第一は学校中における種々の報道である。学校の行事予定を生徒に知らせ、又生徒会等の活動状況をよく生徒に知られる事。即ちお知らせの目的をもっているという事である。第二には生徒が物事に対する正しい思考と批判をするように、拡張して考えれば社会一般の物事について自分の意見をはっきりと持ち、かつ十分に考察して判断する事ができるように導く事である。即ち批判力養成の目的である。第三には学校新聞特有の生徒と教職員や学校との親密化を図る学校の発展を図る事である。

関する報道は不定期や、定期である
 ても一月月に一度位しか発行され
 ない新聞によるもの、人の口伝
 えに伝わってゆく方が遙かに早い
 のはいうまでもない自明の道理で
 ある。しかし全く報道性が必要で
 ないのではない。口伝えに伝わっ
 た事や噂として知れ渡っている事
 と違ひ新聞の報道はかなりの正確
 性を持っており、又読者の方も噂
 として聞いただけでは不確かな事
 として考えていても、一旦新聞に
 報道された時にはそれは正しい事
 と信じてよいように思っている。だからその点に關してだけで
 も学校新聞から報道性を消す事は
 できないのである。

でも新聞の地位が落ちる位置で
なものである。口の報道性の項
も述べたように、学友新聞にお

は、ある事柄の報道と同じ位あるいはもっと重要なものとして、その事柄に対してどのように考えるべきであるかを報道する事即ち評論性があるのである。しかしこの評論は片寄った視点になったもの

や、何の目的もなく物事を軽蔑的に批判するものであってはならない

い。この評論はあくまで学校新聞の責負った使命に沿った客観的なものが要求され又生徒自身が生み出したものである事が重要であらう。ここでは先生の意見も評論としての上げるのは好ましくないので先生という生徒よりも人生経

験の豊富な、物事を見つめる視点が読者である生徒と異なる人の意見

は忠告又は参考意見とはなり得ても、評論というものとは異っている事も知っていただくはならない。生徒が生み出した評論こそ、生徒の思考的水準を高めるに役立つのである。

二、娯楽性、学校新聞における

よ

娯楽性は多くの場合生徒と教職員との結び付きを親しくし家庭的な雰

開気の形成を目的としている。学園校新聞において最も生徒によく読まれた人気が得るのが、この種の娯楽記事である。そして又最も低俗化しやすいのも、この種の記事である。この種の記事の陥りやすい穴はそこにある。低俗化していつ

も、人気がある新聞といふのはよくある事であるが、そのような新盛

聞はその目的、その使命を忘れた
新聞といえる。その間のかね合い
が娯楽性の取扱う上での難かしさ
であり、又やりのいのある所であ

Ⅱ 洛星新聞について

それでは次に洛星新聞を見てみよう。

もし新しい新聞を作る事を自ざします。」といったのにもその意向が

洛星新聞の経過
星の創立以来十四年間の歴史
うかがえるものである。この頃から洛星高校の卒業生が始め、世

を洛星新聞にもっている。その間、洛星新聞は大きく変化してきた。細かい事は抜きにして、ここで大きな流れを見直してみよう。以前の洛星新聞は、現在に比べて、よの生徒と結びついていた。新聞編集者の熱心な企圖と、読者

る生徒の投書の量にそれは現
ている。生徒の方から新聞を
何の引きつける要素をもてい

盛りたてで、たゞという方が適當なくらいである。そしてその時に現われたのは、面白く、楽しい新聞というものであった。局長が就任に當つての抱負を語つた中で「おま

これに纏集万
針にそって、各
洛星新聞のできるまで

局員が各々の分
担を決め、又、決定された原稿用紙の枚数に
まごめあける。この時の忙がしき、殊に月初
期日がせまってきた時の精神的な圧迫、し
かし、それが完成した時の喜びは格別であ
る。

三、割付

が行なわれる。この時に
れ誤字誤植が見出される

六、発行

二校のあと三日目に印
く。これを各クラス、各
に配布される。

最初に決定された編集方針に従い、大まかに割当てられた原稿をよく練り直し、見やすくこの時、週番などが新放送しているが、来ない

い様に丁寧な御の当とる。この時は、原稿の取りに来てもらいたい。

になっていったものであった。し
 そんな新聞がいい新聞とはい
 必要もないような状態なのであ
 っており、今さら新聞で取り上げ
 感じさせ
 その次

はいのであって、そのような新報。未来に於いてもこのような形が変化するとは考えられないから、この先も、洛星新聞に於ける報道性の価値は少いであらう。そこで考えられる事は、論評面の中へ何か取材がなないか、現在でも論評面で埋められた洛星新聞なのがある。采春には創立十五周年を記念しての洛星新聞は、批評性過多の感がある洛星新聞と学校の名を冠した新報である。

れ以上この種の記事を増やす事には問題がある。それよりも当面必
者と新聞

2 洛星新聞の在り方と未来

洛星新聞はこの先如何にあるべきかを考へてみよう。

洛星新聞は、他校以上に報道性占める価値は小さい。何故なら洛星は学校組織の規模が小さい

要なのは、もつと生徒に人気のある記事を掲載する事が必要なのである。洛星新聞ではこのところ評論性を余りに重視しすぎていると思はれるのである。もつと読者にうける新聞を作る事が洛星新聞の歩むべき道であらう。

つきが直る。その国の高校の同輩論評、批評の一致

又先生と生徒の關係が親密な

で大きな
は全國の

俗星新聞局では全園約六十校の
 部と、新聞の交換を行っている
 せられるものが多くある。その一
 つは企画のよきである。僕達、全
 新聞の傾
 最後
 解で
 一つ
 っており

そこで、文芸展示に当り、紙板の提供をお願いした所、多く、見出しを見ただけでどうしてある。そ

他校紙を見ていて非常に関心さ
している新聞をみるにつけ、全く関
心した。

他校紙を見る

最後に他校紙にみる最近の学校の新聞の傾向は、社会記事、政治記事がたまたまややたらと意見をのべるものから、情んなどで考えようとする方向に変わってきている事である。それに従って社会記事は第二面に移り、一面にはもっと情んなどの学校生活に關係のある事で押められてきている。